様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３２８５

研究課題名（和文）再生産労働の国際分業における男性移住者の社会関係とアイデンティティの再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of social relations and identities of male migrant workers under the international division of reproductive labor

研究代表者
長坂　格（Nagasaka, Itaru）

広島大学・人間社会科学研究科（総）・教授

研究者番号：６０３１４４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：再生産労働の国際分業が進展するなかで、女性だけでなく、男性も、国境を越えて、家事労働者、あるいは看護師、ケア労働者として就労する事例が増えてきた。本研究では、これら男性の再生産労働に従事する移住労働者に焦点をあて、同じ国にルーツを持つが、異なる国で異なる職種で就労する男性移住者の経験を比較し、専ら女性移住者、特に家事労働者に注目を注いできた国際移住研究を相対化することを試みた。具体的には、フィリピン出身で、イタリアで家事労働者として就労する男性と、イギリスで看護師として就労する男性の社会関係とアイデンティティの再構築プロセスを記述分析し、その結果を比較した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
異なる国、職種で就労するフィリピン人男性の移住就労経験を比較することで、これまで、女性移住家事労働者に多くの注目が集められてきた「再生産の国際分業」の研究の視点を相対化し、男性移住者をジェンダー化された存在として捉え、移住労働者のジェンダー関係をより関係論的に分析することの重要性を指摘した。また、個別の事例研究では、移住者のジェンダー関係の考察において、出身地社会の諸行為を視野に収める、トランスナショナルな視角の必要性を、具体的な資料から指摘した。

研究成果の概要（英文）：As International division of reproductive labor advanced, not only women but also men have increasingly migrated to work as domestic workers, nurses and carers. By shedding light on male migrant workers who engage in different occupations of reproductive labor in their destinations, this study attempted to expand the field of inquiry in the study of international migration, where much scholarly attention has been paid to female migrant workers' experiences, particularly those of domestic workers. More specifically, it described and compared the processes of reconstruction of social relations and identification among Filipino male domestic workers in Italy and nurses in the UK.

研究分野：文化人類学

キーワード：再生産労働の国際分業　男性性　フィリピン　イタリア　イギリス　家事労働者　看護師

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

経済的に豊かな、いわゆるグローバル・ノースの国（以下、「北」の国）における高齢人口比率の増大および女性の社会進出は、家事、育児、高齢者や病人のケアといった、再生産労働の担い手の需要を拡大させてきた。そして、その担い手の不足を埋める労働者の移住、とりわけ女性の国際移住を増大させてきた。これまで、家事労働者、あるいはケア労働者として、「北」の国で就労する、グローバル・サウスの国（以下、「南」の国）出身の女性移住者を対象とした多数の実証研究が蓄積されてきた。特に「国際移住とジェンダー」という研究領域における社会学的、文化人類学的研究では、このような「再生産労働の国際分業」（R.Parreñas）、あるいは「グローバル・ケア・チェーン」（A.Hochschild）と呼ばれる現象が、ジェンダー、人種・エスニシティ、経済格差が交差する不平等なケア資源のグローバルな配分をいかに維持・拡大させてきたのか、さらに、そこに参与する人々のジェンダー関係・家族関係をいかに変えてきたのか、あるいは変えなかったのか、といった点が論じられてきた。しかし、「再生産労働の国際分業」が進展する中で、少なくない数の「南」の国出身の男性が、移住労働者として国境を越えて就労してきたことには、これまでほとんど注意が向けられてきてこなかった。

また、「再生産労働の国際分業」に関する研究においては、「北」の国で就労する「南」の国出身の家事労働者に特に注目が集まってきた。こうしたなか、Yeates は、それまでの再生産労働の国際分業の研究が家事労働者に限定されてきたことを批判し、その研究対象を看護師やセックスワーカーなどにも拡張し、ケアの内容や技能化・制度化の度合いを異にする職種に従事する女性の経験を比較検討していくことを提案している（Yeates, N., 2004,“Global Care Chain: Critical Reflections and Lines of Inquiry” *International Feminist Journal of Politics* 6(3):369-391）。本研究は、「再生産労働の国際分業」の枠組みにおけるケア労働者の範囲を拡張し、比較していくという Yeates の提案に沿いつつも、男性移住者に焦点を当てることで、女性移住者中心に行われてきた、「再生産労働の国際分業」、あるいは「グローバル・ケア・チェーン」に関する既存の議論を再検討することを試みた。

２．研究の目的

本研究の目的は、①イギリスで就労する、フィリピン出身の男性看護師を主たる対象として、彼らが再生産労働に従事する中で、いかに社会関係とアイデンティティを再構築してきたかを記述分析すること、②代表者がこれまで実施してきたイタリアのフィリピン系男性家事労働者の調査を継続させ、彼らが再生産労働に従事する中で、いかに社会関係とアイデンティティを再構築してきたかを記述分析すること、③それらの研究結果の比較を通して、男性移住者を組み込んだ形での「再生産労働の国際分業」の研究枠組みを構築していくことである。

３．研究の方法

研究期間を通して、イギリスのフィリピン系男性看護師・介護労働者などを対象とした聞き取り調査および参与観察、イタリアのフィリピン系男性家事労働者などを対象とした聞き取り調査および参与観察を実施した。

イタリア調査は、2017 年度に 2 度実施した。2 度の調査では、これまで代表者が調査を実施してきたフィリピン北部の農村地域出身の 6 名のフィリピン系男性家事労働者、あるいは家事労働者経験者に詳細な聞き取りを実施した。その他、過去の調査で聞き取りを実施した、女性を含む多数の家事労働者に補充の聞き取りを実施した。また、フィリピンでの調査地出身で、イタリアで就労生活する人々の間での参与観察を実施した。

イギリスでは、2017 年度にロンドン、およびイングランド東南部で、28 名のフィリピン出身者に聞き取りを実施した。そのうち、男性は 11 名であった。対象者には、看護師および医療技術者、看護師の配偶者、介護者あるいは看護助手、介護者の配偶者、結婚移住者、家事労働者が含まれる。

2018 年度には、これまで調査を実施してきたフィリピン北部の農村地域を訪問し、男性移住労働者たちの故郷での行為に関する参与観察を実施した。また、かつてイタリアで家事労働者として就労し、現在は引退しフィリピンに在住していた男性移住者 1 名への聞き取りも実施した。2019 年度にも、フィリピンでの現地調査を再度実施する予定であったが、新型コロナウィルス感染症の拡大の影響で、調査を断念した。2020 年度まで研究期間を延長したが、結局、予定していたフィリピンでの現地調査は実施できなかった。

４．研究成果

（１）イタリア調査およびフィリピン調査から：イタリアの男性家事労働者

イタリアでは、1980 年代以降、多くのフィリピン人が家事労働者として就労するようになった。彼らの多くは、親族や同郷者の支援を受けてイタリアにきており、ほとんどのフィリピン人はイタリア国内に親族がいる。イタリアの外国出身の家事労働者のなかには、少なくない数の男性が含まれているが、とりわけフィリピン人ではその比率が高く、1991 年から 2005 年の間、家事労働者のなかの 25%が男性であったという指摘もある。それら男性家事労働者の多くは、先

行する女性親族や配偶者に呼び寄せられてイタリアに来て、就労することが多かった。
　家事労働者への聞き取りと参与観察からは、「より強い」などの男性的な要素を強調することで、男性家事労働者の優位性を指摘するような語りがよくなされる一方で、他国出身の男性移住家事労働者たちとの比較では、家事労働職に就くこと自体による男性性への脅威が語られることが少ないことが明らかとなった。その背景には、先行研究が指摘する（Parreñas, R. 2015. *Servants of Globalization [2nd Edition].*）、アメリカ植民地期フィリピンにおいて多くの男性が家事労働者として就労していたなどの、出身地社会におけるジェンダー関係の歴史的基盤があると言える。研究期間中に発表した論考では、そうした歴史的背景に加え、リスクを冒して移住し、移住先で働き続け、故郷の村に自らの家を新築して、家族や親族に経済的支援を行うという彼らの移住経験が、出身地社会の理想的男性像に合致していることも考慮すべきであると考察した。
　また、これら男性移住家事労働者たちの出身地社会での参与観察からは、彼らが、男性親族への種類の気前のよい振る舞いや、ギャンブルの場での大胆な賭けを行うことなどの、男性サークル内で評価される行為を実践していることが明らかとなった。そうした彼らの行為は、よき家族の養い手、よき親族の一員であるための諸行為を行っている限りにおいて出身地社会では是認されている。しかし同時に、そうした行為は、既存の特定の男性性イメージを温存、拡大させることを通して、イタリアで同じ家事労働職として働く彼らの配偶者の家計負担を増大させてきたと考えられる。こうした知見は、男性移住者をジェンダー化された存在として考察することの重要性、また、それら男性移住者のジェンダー関係を考察する際のトランスナショナルな視角の重要性を示していると言える。

（２）イギリス調査から
　調査対象者のほとんどすべてが家事労働者を経験し、正規・非正規を問わず、親族や配偶者の呼び寄せで移住してきていたイタリアとは異なり、イギリスでは、対象者の職種、移住ルート、滞在資格・国籍にかなりの多様性が見られた。移住ルートとしては、後述する看護師（女性 6 名、男性 3 名、結婚移住後に看護師となった 1 名を除く）以外では、看護師に呼び寄せられた配偶者（男性 4 名）、2000 年ごろに受入がおこなわれたケアホームで就労するケアラー（女性 1 名）とケアラーによって呼び寄せられた配偶者（男性 2 名）、様々な経緯でイギリス人と知り合い、イギリスにきた結婚移住者（女性 4 名、男性１名）、医療系などの技術者（女性 2 名）、その他（女性 4 名、男性 1 名）である。こうした対象者の間で見られる移住ルートの多様性の背景には、イギリス政府が、政策を細かい点では頻繁に変更しつつも、医療、介護分野を中心に、特定の職種の外国人移住者を大量に受け入れてきたことがある。フィリピン人に関しては、看護師の受け入れが主要な移住ルートとなってきており、NHS（国民医療サービス）に多数のフィリピン人が雇用されることで、地域のフィリピン系人口が増える構図がある。
　イギリスの看護師の受入国としての歴史は長いが、1990 年代から 2000 年代半ばにかけて多数の外国人を看護師としてリクルートした。対象者も、1970 年代に看護学生の募集に応募して移住してきた 2 名を除き、1990 年代後半以降にイギリスに移住していた。
　男性看護師の聞き取り対象者 3 名のうち、2 名は農村出身であり、1 名は都市部ミドルクラス出身であった。農村出身の 2 名は、それぞれアメリカで看護師として働くオバ、元軍人で恩給がある祖父の経済的支援を得て、「仕事が得やすい職」として、あるいは「海外に行くためのチケット」となる仕事として看護師を志望した。都市部出身の 1 名は、歯学部を志望したが、キョウダイが多かったので学費がさほどかからない看護師コースを選択した。いずれの話者も、当時看護師コースの男性の学生数も少なくなく、看護系の大学を選択することに抵抗を感じることは全くなかったと述べた。また、男性が看護師として勤務することについても、すべての話者から「全く問題ではない」という言葉が聞かれた。イタリアの男性移住者たちとの比較でみれば、イタリアの男性家事労働者たちの間での、男性性を強調するような語り（男性にしかできない仕事をする家事労働者など）や男性性と関わるような行為（集まっての飲酒など）は、イギリスにおいて目立つものではなかった。むしろ、男性性の概念が問題となるとすれば、それは、看護師の妻に呼び寄せられ、看護助手や清掃職などとして病院に勤務する男性たちの間であったと言える。対象者が少なく、この点に関する資料は十分ではないが、先行研究が示唆しているように（ジョージ, S.2005『女が先に移り住むとき』）、フィリピン系住民が集まる教会など就労の場以外に、自己形成の基盤を置くような振る舞いも見られ、就労、家族、移住者コミュニティそれぞれに目配りをすることの重要性が示唆された。

（３）まとめ
　イギリス調査は、調査対象者となった男性看護師が少なく、出身地への訪問もできなかったため、トランスナショナルに長期的な参与観察を続けてきているイタリアの男性家事労働者についての調査結果との直接的な比較は難しい。しかし研究目的に沿って比較をすれば、イタリアとイギリスの移民レジームの違いが、フィリピンから両国への移住者の選別過程、移住先への包摂過程をまったく異なるものにしていること、またそのことと関連して、イタリアの男性移住家事労働者たちの間で色濃く見られた「男性性」に関わると考えられる諸実践や語りが、イギリスの男性看護師たちの間では前景化しないことが指摘できる。この比較結果は、「再生産の国際分業」の展開のなかで移動する人々の移住経験を、出身地社会のジェンダー概念と、移住先での職種や移民レジームとの交差のうちに捉える、関係論的なアプローチの重要性を示していると言える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Fresnoza-Flot Asuncion、Nagasaka Itaru	４．巻 23
２．論文標題 Lingering Caregiver-Child Relations across Borders: Filipino Migrant Youths in Europe and their Stay-behind Carers in the Philippines	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Zero-a-Seis	６．最初と最後の頁 889～914
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5007/1980-4512.2021.e78480	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 長坂格	４．巻 57
２．論文標題 書評　堀江美央『娘たちのいない村―ヨメ不足の連鎖をめぐる雲南ラフの民族誌』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東南アジア研究	６．最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 長坂格	４．巻 57
２．論文標題 書評　細田尚美『幸運を探すフィリピンの移民たち―冒険・犠牲・祝福の民族誌』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	６．最初と最後の頁 231-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 長坂格
２．発表標題 再生産労働の国際分業における男性移住者の移住経験―イタリアのフィリピン人男性移住家事労働者の事例から
３．学会等名 第24回フィリピン研究会全国フォーラム
４．発表年 2019年

１．発表者名 Nagasaka, Itaru
２．発表標題 Migrant Men in Global Care Chain: Migration Routes and Reconstruction of Identities among Filipino Male Migrants in Italy and the UK.
３．学会等名 7th Trans Pacific International Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Itaru Nagasaka
２．発表標題 Imagining a life somewhere else: Transnational Engagements and Future Visions among Filipino Young Immigrant's Children in Italy
３．学会等名 Brussels Anthropology Seminar, Free University of Brussels（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Itaru Nagasaka
２．発表標題 Migratory experiences, transnational ties and self-making of young Filipinos in Italy
３．学会等名 SCMR Migration Seminar Series, University of Sussex（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 Fresnoza-Flot, A. & I. Nagasaka	４．発行年 2020年
２．出版社 Sage	５．総ページ数 全224頁中17頁
３．書名 Fluctuating social class mobility of Filipino migrant children in France and in Italy. In C. Baraldi & L. De Castro (eds.) Global Childhoods in International Perspective: Universality, Diversity and Inequalities	

1．著者名 Nagasaka, I.	4．発行年 2020年
2．出版社 Routeledge	5．総ページ数 全216頁中22頁
3．書名 Rearraying available resources to secure livelihoods: Continuities and change in livelihood strategies in a rural village in Ilocos, Philippines. In K. Seki ed. Ethnographies of Development and Globalization in the Philippines: Emergent Socialities and the Governing of Precarity	

1．著者名 長坂格	4．発行年 2021年
2．出版社 七月社	5．総ページ数 全400頁中30頁
3．書名 「『再生産労働の国際分業』のなかの男性移住者：イタリアのフィリピン人男性家事労働者の男性性と自己の再構築」越智郁乃・関恒樹・長坂格・松井生子編『グローバリゼーションとつながりの人類学』	

1．著者名 長坂格	4．発行年 2018年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 全368頁中26頁
3．書名 「フィリピンの地方における国際結婚移住の歴史的展開」藤井勝・平井晶子編『外国人移住者と「地方的世界」』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	小ヶ谷　千穂 (Ogaya Chiho) (00401688)	フェリス女学院・文学部・教授 (32711)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関